

胡弓を弾く盲僧

石井正己

(一) 室町・江戸期の盲僧と胡弓

〔「いきよ・いきう」〕

現存最古の狂言本『天正狂言本』(天正六年(一五七八)奥書)の『鞠ざとう』(現行曲も『鞠座頭』)に、「いきよ」と呼ばれる盲僧が登場する。

「けんぎふ一人出て、こきよをよび出す。ざとうたちをよび出し、鞠ける。後、鞠にすゞをつくる。しばらくくる。後はけんぎふをふみころばして帰る。けんぎふ後はら立て、かたなきて引こむ。」

『天正狂言本』の座頭狂言には、「つのをさぐりて、はら立て、こきよに、目出たき御代のはじめには、駒にもつのがおひそるよ。とをしある。……」とある『だらんざとう』(現行曲はない)、「ざとう一人出て、はくゆふと名のつて、いきよをよび出す。……」とある『馬かりざとう』(現行曲は『伯養』)にも、「いきよ」が登場する。

また、御伽草子『鼠の草子』(サントリーアート美術館蔵・室町末期から江戸初期の間に成立か)で、鼠の権頭が柳屋の三郎左衛門という長者の娘を嫁に迎えるくだりに、当道盲僧として「いきう」なる人物が出てくる(絵画の中の名にはない)。

この御嫁迎ひ、その隠れやなかりけん、在京として集まりるける検校、勾当、座頭、こきうに至るまで、一方には妙觀派、師堂派、戸島派、源照派、八坂方には大山派、妙聞派、中の悪しきも親しきも、かやうのめでたき御時は、われ劣らじと進み出で、立ち並びたる棒の音、からりからりとつきつれて、琵琶をばあとにかけさせて、いそがはしげに歩み行く。⁽²⁾

これらの「こきよ」「いきう」の意味については、「未詳。検校や座頭に召使はれてゐる者らしい。児座頭か。コギョウと読むべきかも知れない」⁽³⁾、「未詳。官位をもたない初心の盲人をいうか」⁽⁴⁾、「室町期には小座頭は「こきう」ともいわれました」⁽⁵⁾、「小盲」などの説がある。しかし、小座頭・小盲にしても初心の盲人にして、「いきよ」「いきう」の名で呼ばれる理由が説明できない。⁽⁶⁾

そうした中で「盲人たちの官位を示すもの(小検校一小校、実際

にこのような官位は見あたらない）ではなく、⁽⁷⁾ 蜜琶や三味線ではない、胡弓を専門に扱う座頭をさすのかもしれない」という説は、説得力がある。「こきよ」「こきう」は仮名遣いに揺れがあるが、コキユウと読み、胡弓を弾く盲僧を意味するにちがいない。もちろん「検校、勾当、座頭、こきう」という順序から考えれば、小座頭・小盲や初心の盲人と重なることのあるのだろうが、それらはこの呼称にとつて本質的な意味ではない。

〔胡弓の起源・改良と検校〕

江戸期における盲僧と胡弓の関わりを示す資料は多くはないが、『糸竹初心集』（寛文四年（一六六四）刊行）の「三味線の次第の事」の条には、次のような一節がある。

抑日本に三味線をひき初めし事は、文禄のころほひ、石村検校と云ふ琵琶法師あり、心たまみにして器用無雙の者なり、あるとき琉球の島にわたりけるに、かの島に小弓といひて、糸を三筋にてならす物あり、小き弓に馬の尾を絃にかけて引くなれば、小弓とは云ふとぞ、石村これを採りみるに、琵琶をやつしたる物也、いとのしらべやうも、一二はびはのとく、三の糸はびはの三よりも二調子ほど高くあはせたるもの也と思へり、所のものいひけるは、此島には真蛇の多き所なるが、らへいかといふものありて此まむしを食物とする、さらばらへいかのなく声、小弓の音に少しもちがはざる故、真蛇を退けんが為に専ら引く也、琵琶法師も、爰に逗留の間は、引き給へといひ、其後石村京都にかへりて、おなじく琵琶此をやつし、三味線をつくり出せり⁽⁸⁾

石村検校の三味線考案譚の前提に、琉球における胡弓の伝承が入り込んだ説話である。「文禄の頃（秀吉の時代）に石村検校が琉球に行き、彼地の胡弓を持ち帰つてわが国の胡弓を作り出した」史実を表しているというが、胡弓の渡来は室町末期に遡ると考えられるので、この話をそのまま胡弓渡来の起源を表した史実と見ることはできない。

また、『色道大鏡』（延宝六年（一六七八）成立）の「小弓」の条には、次のような記述がある。八橋検校の胡弓改良譚である。

むかしは、遊興の座へかならず出したれど、この頃はよくひく人もなければ、絶て久しく出さず、むかしの小弓は、弓の絃をいたくはりて引用ひたり、小弓も、八橋検校みづから考へて、弓をなめらかに長く、手づから削りてこしらへたり、絃を引はらず、ゆた／＼とゆるやかにのべて、無名指にてひくやうにかけたり、その色音、昔にかはり格別也⁽⁹⁾。

その後も植藤検校は四絃の胡弓を作つてゐる。胡弓（に類する楽器）は、アジアからヨーロッパに広がつてゐるが、名だたる検校の関与によつて、形の上でも日本の発達を遂げたのであつた。

〔当道盲僧と地神盲僧の抗争〕

九州地方では、『平家』を語つた当道盲僧と地神盲僧との抗争が続いていたが、延宝二年（一六七四）にそれが幕府の公事に持ち込まれた。その結果、寺社奉行が当道盲僧側の要求を全面的に認めたため、地神盲僧は一切の遊芸を禁止されることになつた。その際の当道盲僧側の記録『当道大記録』（浮嶋本）に、次のような一節がある。

一、淨瑠璃を語り筑紫箏三味線胡弓などの座頭芸、一切不可仕、

但（イ先）琵琶之儀は古来より地神經に乗せ弾來り候間、可為其通、但し座頭の琵琶所持仕間敷事⁽¹⁾

また、地神盲僧側の記録『徳川代々評定所張紙』にも、次のような記述がある。

一、小弓、三味線、筑紫箏、小歌、淨瑠璃、一切遊芸を以、渡世仕間敷事⁽²⁾

当道盲僧というと『平家』だけを語っているように思われがちであるが、『平家』を語ったのは上層階級の盲僧たちだけで、多くの盲僧はここに出ている淨瑠璃・筑紫箏・三味線・胡弓・小歌などの座頭芸に携わっていたにちがいない。地神盲僧はこうした当道盲僧の座頭芸を真似て芸を演じ、当道盲僧の存在を脅かすほどになつていたのであつた。

この中に「胡弓」「小弓」があるから、九州地方では地神盲僧の中にも胡弓を弾く盲僧がいたことになる。この禁令の後、筑紫地方の地神盲僧は早くも座頭芸を行つてゐるから、この禁令が末端までどれほどの効力を發揮したのか疑わしい面もあるが、現在では胡弓を弾く盲僧もそれに関する資料もまつたく見出だすことができない。

当道座と天台宗の抗争が緩やかであつたと思われる東北地方で、この抗争がどの程度影響を及ぼしたかは不明な点が多いが、九州地方では絶えしまつた胡弓の芸の伝統が旧仙台藩領では命脈を保つてきらししい。しかも、その胡弓は三絃で、江戸中期以降関東地方に広まつた四絃の胡弓ではないから、胡弓の形状からもその芸は古い伝統を引くものであると推測される。

宮城県北部では、胡弓を弾く盲僧一人と類似の芸を三味線で弾く盲僧一人が確認できている。この辺りは、奥淨瑠璃の流派でいえば、かお一節（川下節）・濁沼節の行われた地域である。

〔宮城県本吉郡歌津町の阿部梅之助〕

この人は、本吉町旧小泉地区を調査した『小泉の民俗』（東洋大学民俗研究会、一九八二）で報告されている伝承者であり、開書①・②は追跡調査したものである。

①歌津町の葦の浜にカッコウボウ（カッコウボウサン）というザトウがいて、本吉町馬籠にいたとき、年に二、三回は胡弓を弾きながら杖を突いて歩いて來た。宿は決まつていた。三分程度のダンモノを語つた。演題は『一の谷嫩軍記』（敷盛の最期）『耳無し芳』『壇の浦（安徳帝入水）』『八島の合戦』『宇治川の先陣』『常陸丸の最期』『秀頼が清正の顎髪を引っ張つた話』などであつた。哀れなところや勇ましいところを語つた。チヨボクリ（チヨボ）も語つた。門を送るとときに「ボウサン、どつち行く」と聞くと、「風と坊主は昼立ちだから」と答えた。

（本吉町の佐藤末治郎翁（明治四年生）より開書）

②カツコンボウ（カツコボウサマ）は、昭和一四年頃まで本吉町小泉に來た。短い杖を突き、白い大きな風呂敷を背負つて來た。手を使つて「カツコン、カツコン」と鳥が鳴く真似をしたり、子供に囃されて水溜りを飛んだりした。八幡神社の神主の家に

泊った。胡弓を弾きながらオクニ「奥淨瑠璃」を語つて聴かせた。演題は『八島の戦い』『弁慶の五条橋』『田村』『鷺越え』など、五分から一〇分くらいだった。オクニの文句について聞くと、頓智な答えが返つて来た。正月元日から一五日に来たときは餅を食わせた。夜オクニを語つた。八月一三日の八幡神社の祭典の前後にも来た。(二二日の夜オクニを語つた。(本吉町の千葉東翁(明治四五年生)より聞書)

③カツクリボウといった。尺八を吹き、胡弓を弾いて聴かせた。淨瑠璃を聴いたこともある。『朝顔日記』で、五分程度だった。葦の浜の愛宕神社の祭典・お精進・春と秋の契約講に呼んで、淨瑠璃を語つてもらつた。チヨボクリもした。これは節もなく



梅之助の三味線・胡弓など。1986・3・30撮影

て指音を立てながら頓智などを語る。ナゾカケもした。名付けはしたが、占い・祈禱はしなかつた。(歌津町の小野寺清吾翁(明治四二年生)より聞書)

④カツコボウサンと呼ばれていた。昭和一三年八月一四日に死去。登米郡中田町桜場の出身である。三味線「三本継ぎ、長さ約九五・五cm」と撥「角製、長さ約二三・五cm」、胡弓「二本継ぎ、長さ約六三・〇cm」と弓「竹製、馬の尾の絃、長さ約五三・三cm」、尺八「長さ約五六・五cm」、三味線や胡弓を入れた箱「縦約一九・五cm、横約八五・〇cm、高さ約三三・〇cm」がある。この箱を風呂敷に入れ、背負つて歩いた。胡弓を弾きながら、子供たちに「胡弓、胡弓、何食う?」「あんこ餅三杯食う」などとうたつて聴かせた。(歌津町の阿部寅治郎御夫妻(妻は梅之助の子)より聞書)

梅之助は、郭公の鳴き真似(八人芸から取り入れたのであるうか)が上手だったので、カツコボウボウ・カツココンボウ・カツクリボウなどと呼ばれていた。この人は、葦の浜の自宅から本吉町、岩手県東磐井郡室根村を経て、気仙沼市の山間部八瀬まで歩いているが、気仙沼では出身地をとつてサクラバボウ・サクラバザトウと呼ばれている。¹⁴⁾

梅之助の所持品「写真参照」は、葦の浜の家に保管されている。三味線は三本継ぎ、胡弓は二本継ぎなので、解体すればこの箱に入れられる。継ぎ三味線・継ぎ胡弓は、後述するように岩手県でも用いられていた。箱はボサマが「三味線箱がら三味線出して」などとある三味線箱に当たるのかもしれないが、むしろ形状からはオカミ

サマが用いるウツネ箱に似ているから、これを転用したもののように思われる。

梅之助は三味線を持つてゐるが、胡弓で奥淨瑠璃を語つたようである。演題としては一種が知られるが、特に『平家物語』に取材した平家物が多いことが目に付く。『秀頼が清正の顎髷を引つ張つた話』は、おそらく九州地方の盲僧が語つたチャリ物の中の『ひげ茶の湯』と一致する滑稽物だろう。また、『小泉の民俗』には「一口話」二話が載せられているが、話者と梅之助の間に交わされた会話を見ると、どうも淨瑠璃の詞章の中にすでに滑稽な表現があつたようである。とすると、九州地方の盲僧がクズレの中で語るチャリのような語り口が奥淨瑠璃にもあつたことになる。

この人のチョボクリは指音を立てて語るのであるが、それは早物語だったらしい。事実、気仙沼市長岩間の菅原伊勢治翁（明治三〇年生）¹⁶が、梅之助からチョボクリを聴き覚えている。

梅之助は地元垂の浜では愛宕神社の祭典・お精進・春と秋の契約講に呼ばれたり、本吉町には正月や八幡神社の祭典に行つてゐる。これまで盲僧がどのような場で芸を披露してきたあまり知られていないなかつただけに、周辺地域の行事と結び付いた活動は注目に値する。八幡神社の神主は法印であるから、修驗と盲僧との関わりを示す事例になる。

〔宮城県氣仙沼市上鹿折の村上利七〕

大正三年八月一二日に七一歳で死去。行屋のザトウボウサマ

（センマのザトウ）などと呼ばれた。祭文（ある人は義太夫といふ）、阿呆陀羅經（阿呆陀羅お経）を語り、都々逸を歌つた。

祈禱・八卦・まじないもした。ザモンカゴをしょい、赤いケツトンを着て、六尺の竹の杖を突いて歩いていた。三味線に「三味線、三味線、南蛮餅好きか」と聞き、三味線で「やんだ」と答えるようなこともしてみせながら、実際に氣仙沼市内のうどん屋に

南蛮「唐辛子のこと」を売りに行つていた。南蛮餅とは実際にありえない餅である。（川島秀一の調査報告の概要）三陸海岸沿いにも何人かの盲僧が活躍していたが、その中の一人である。この人は胡弓は使わないが、餅の問答は胡弓の芸を転用したものと思われる。後述する。

（三） 岩手県の胡弓を弾く盲僧

旧仙台藩領に属する岩手県水沢市周辺でも、胡弓を弾く盲僧三人が確認できいる。この地域は、奥淨瑠璃の流派でいえば、胆沢節（川上節）・江刺節が行われていた。芸能を演じる盲僧を支配していた当道座の廃止に伴つて、加持祈禱を行う盲僧を支配した天台宗が管理を強めていた地域である。中尊寺の瑠璃光院が岩手県の盲僧の管理に当たつたが、その出先機関ともいえる千養寺が羽田町の旧黒田助地区にあつた。この千養寺は明治期に江刺盲僧の拠点でもあつたところで、戦中は戦勝祈願の祈禱をし、戦後も公進会と称して、北上市から一関市までのボサマやオカミサマ三〇人近くが年に一回集まつていた。

〔岩手県水沢市羽田町の佐藤春吉〕

①春吉ボウサンと呼ばれていた。主に正月と盆に黒田助に來た。

田舎店をしていた某家を常宿にしていたが、自分の家に泊まつたこともある。家内安全の札を配つて祈禱をした後、黒田助の人が米・錢を持つて集まつた座敷で胡弓を弾きながら民謡をうたつた。日清戦争当時に流行した「日清だんばん破裂して、山口大将劍抜いて、帝国万歳大勝利」とうたつた。「胡弓や」「うん」「これやるか」「うんうん」と胡弓と問答をしてみせた。

『一の谷』『八島』『那須の与一』『掃部長者』などの淨瑠璃を三味線を弾きながら語るのも聴いた。着物に下ズボンで、尻はしょりをして、竹籠に胡弓を入れ、風呂敷で包んでしょって来た。言葉、口調、顔の表情のおもしろい人だった。(羽田町の千葉長英翁(大正四年生)より聞書)

②春吉は本名「法名?」を正順といつた。この家で生まれ、昭和一年頃死んだ。師匠は羽田町の森にいた人である。三味線「太棹、三本継ぎ」と胡弓「二本継ぎ」を行李籠に入れ、風呂敷に包んでしょい、着物を着、足駄を履き、杖を突いて歩いた。三味線は淨瑠璃を語るときに使つた。演題は『一の谷』『先代萩』『那須の与一』『掃部長者』などで、一時間くらいかかった。胡弓は子供や女に唄をうたうときに使つた。おどけて子供相手にチヨボクリをして見せることが多かつた。これは楽器を使わない。男の庚申講・女の山の神講などのお精進やサナブリに呼ばれた。胆江地区を中心に一年中歩いていた。氣仙の方へも行つたようだ。貰つてくるものはお金だった。黒田助の千養寺には時を限らず行つた。病気のまじないや八卦をすることもあった。尺八や八人芸はしなかつた。(羽田町の佐藤幸夫翁(明治四年生)より聞書)

年生、春吉の子)より聞書)

③佐藤春吉はショウジンボウといい、この家にも胡弓を持ってよく來た。いつも限らず来て、ここからどこかに出掛けて行つては、帰りにまた立ち寄つたようだ。父は「ショウジン、按摩それや」と言つて、按摩をとらせた。師匠の小登寿から按摩の指導も受けたようだ。また父は「ショウジン、ジョロリ語れや」と言つて、淨瑠璃を語らせた。三味線を弾きながら語つたが、演題は『一の谷』『静御前のこわち落ち』であつたと思う。胡弓を擦りながら唄をうたつこともあつた。胡弓は、正座をして、膝の上に立てて擦つた。胡弓に「小豆餅食いたいか、：：」とうたい掛けることもした。三味線はヒク、胡弓はスル、琵琶はハダケルといった。(羽田町の佐藤勲翁(明治四年生、春吉の師匠の孫)・キクエ姫(明治四年生)より聞書)

④昭和二、三年頃、岩谷堂の師匠キクチキンリョウのところで仲間の集まりがあつたとき、鷺沢のショウジンが胡弓を弾いてオイトコブシをうたつた。「胡弓や」「ん」「胡弓何好きだ?」「餅好きだ」「胡弓唄うたつて聴かせろや」「ん」などと胡弓と問答をして見せた。声のよい人ではなかつた。この人はオクニブシも語つたかと思う。八人芸はしなかつた。(姉体町の佐藤宝山翁(明治四年生、盲僧)より聞書)

⑤五〇年ほど前「泊めてくれ」と言つてきたボウサマがいたので、自分の家に泊めた。雪のないときだつた。江刺の人で、胡弓を持つて來た。胡弓を弾きながらストンブシ・ラップブシなど簡単な唄をうたい、門を數えて歩いた。この人は鷺沢のコキ

ユウボウサマと呼ばれていた。(東磐井郡大東町の千田よしの

姫(明治四年生、オカミサマ)より聞書)

春吉は鶯沢の近くの黒田助では本名をとつて春吉ボウサン、師匠

の家では弟子名をとつてショウジンボウ、遠く東磐井郡大東町では

鶯沢のコキユウボウサマと呼ばれている。ある固定化された名(この人なら正順)にとどまらず、梅之助の場合と同様、地域の人々との関係を象徴的に表した名で呼ばれている。

春吉の場合も、梅之助の場合と同様に、三本継ぎの三味線と一本継ぎの胡弓を使っている。この人は三味線と胡弓を明確に使い分けている、三味線は淨瑠璃に、胡弓は民謡・童謡・流行歌、あるいは滑稽な問答に使っている。幼いときに寧淨瑠璃を習つたことのある盲僧佐藤宝山翁は、胡弓ではオクニブシは語れないと言つてゐるから、梅之助が胡弓を淨瑠璃の伴奏に使つていたのは、やや特殊なことなのかもしれない。春吉の場合は、淨瑠璃の演題六種が知られる。一時間程度かかつたというから、本格的な淨瑠璃だったのだろう。男の庚申講や女の山の神講などのお精進やナナブリに呼ばれているのは、梅之助の場合と同じく周辺地域の行事に密着してゐることを示していよう。

〔岩手県胆沢郡金ヶ崎町のシンメイ〕

シンメイは金ヶ崎の大本松の人で、八人芸をしながら衣川村権原の家に何回も来た。秋の彼岸から春の彼岸に歩いた。八人芸のほかに、オクニブシ・胡弓をした。オクニブシは「天皇の子供」が長者の家の娘に惚れて、乞食として家に入り、皆が草刈るとき、笛を吹いて楽しませた。帰りは牛に乗つて帰つた」と

いう内容のものであつた。三味線は中棹で、通しか繋ぎか不明。

胡弓は通しだつたう。胡弓についてはショウジンと同じ。ム

カシも妹たちに聴かせていたようだ。(前述の佐藤宝山翁より聞書)

シンメイは、春吉の師匠佐藤小登寿の弟子に「金ヶ崎のシンメイ」という人がいたというから、二人は同一人物であろう。小登寿の弟子は三人あつたが、シンメイは二番弟子、春吉は三番弟子だつたようである。三人が小登寿と妻であった二人のオカミサマ「死別後再婚」のために建てた墓が宝全寺に現存するが、それによればシンメイの名は千葉武正「武は磨滅していく読みにくい」である。小登寿は『草刈山路』の淨瑠璃本を所持していたというから、シンメイの淨瑠璃はこれをもとにしているかもしれない。胡弓の芸が一致するのは、兄弟弟子だからだろう。

春吉とシンメイの師匠佐藤小登寿は、イチカタの位を持ったボウサマで、コトジイチと呼ばれ、普通のボウサマでは持つことのできない擬宝珠の杖「現存する」を持っていたと家では伝えている。イチカタとは当道座の一方のことであり、イチの付く名を持つから、まさに芸能に関わつた当道盲僧だったのである。擬宝珠の杖は、「杖の頭に擬宝珠の形を刻み付墨塗にしたるは検校なりとす」とあるのを考えれば、検校位にあつたことになる。小登寿は当道座廢止後天台宗に入り、明治中期には「江刺郡の触次」をしている。小登寿は胡弓を弾かなかつたと伝えているのは不思議な気がするが、盲僧としての地位が昇進していくので、胡弓の芸を止めたのにちがいない。それは室町期に「ノキフ」「ノキウ」が盲僧の最下層に位

置づけられていた伝統と無関係ではあるまい。

〔水沢市古城のレンタロウ〕

衣川村檜原の家に二、三回来た。八人芸・オクニブシ・胡弓を

した。(前述の佐藤宝山翁より聞書)

この人については、「現在これだけしかわからない」。

(四) 胡弓を弾く盲僧の芸

〔民謡・童謡など〕

胡弓を弾いた盲僧は、オイトコブシ・ストンブシ・ラッパブシ・ションドコブシ・オイワケブシ・流行歌・唱歌などの人口に膾炙した民謡をうたつていて。盲僧の胡弓の芸の中心は、おそらくこうした民謡をうたうことだったにちがいない。

千田よしの姫はほかに、コキュウボウサマつまり佐藤春吉が門付ける様子を次のように話している。

「例え店屋さ行ってね、昔の言葉だからね、「見えたア、見えたよオ、松ウ原ア越しひにイー」なんて、そしてその、胡弓つうもの弾いて合わせてね、「どうも御苦勞さんでした、はい」なんて、そしてね、また次にね、隣さ行ってね、「ストトン、ストトン」と戸を叩く、主さん來たかと見て見たらアー」なんてね、その胡弓で、こう合わせてね、そしてまた「どうも御苦勞さんでした」て、お金あげんの、そうすっとね、「ありがとうござります」て、またそつちの方さ行って、また別な唄、同じことでなくてね、三くだりぐれうたつたり、「ああ、あげて

あげて」て、そして出してやつて、頂いて歩いた」
佐藤宝山翁はほかに、シンメイの胡弓の芸を次のように真似ている。

「シヨンデコブシうたえ」とかなんとかつて言えば、「ん、胡弓や、あのな、みんなシヨンデコブシ聴きてえとや」「はア」なんていうようにしてね、「しょんでここはなア、どオコオでうウウまれエテ、コオエエがよオイイな、このしょん一でこオナア、ありやしょんでこな」つうようにやればね、「あア上手だ、上手だ」なんてね」

また、シンメイは子供相手に胡弓で次のように童謡を弾いて見せたという。

「まま」と遊びみてえなもの、まず例えば、「胡弓」「んー」なんて、「唱歌知つてるかア」「知つてたア」なんていうふうに、こうまずね。そしたらば、「じやあ、唱歌うたつてみろ」「あ」なんて。「あア」なんてこう、そしたら「ボッボッボ、鳩ポッポオ」つうようにね、こう鳴らすんだ。「あア、胡弓、上手だなア」なんてや。「ん」「上手だなア」「はあア」なんてね、いうように弾くもんだからね」

シンメイの場合、こうした胡弓の芸を淨瑠璃や八人芸に先立つて演じたようである。

〔餅の問答〕

盲僧と餅のつながりについては、はやく柳田国男が指摘しているし、東北地方の盲僧の代表的な早物語『餅合戦』について論じたことがあるが、ここでもまた盲僧と餅との強いつながりを示す伝承を

見付けることができた。この盲僧が胡弓で語る（うたう）餅の問答

は、宮城県でも岩手県でも見られる伝承であった。

阿部梅之助の伝承としては、ほかに次のようない報告もある。

サクラバ座頭（カツコウ坊）が門に立ち、胡弓を引いて、「コ

キユ（胡弓）コキユ何食う、アズキ餅三杯食う」と語つ

たのを覚えている。（氣仙沼市の熊谷ミノヘ媼（明治三二年生）

より聞書）

「あんこ餅」「小豆餅のこと」と「アズキ餅」との異伝であるが、どちらにしても胡弓に問い合わせ、胡弓になりかわって答えるという問答を一人で演じて見せたのである。

佐藤春吉の伝承としては、ほかに千田よしの媼が真似てくれた次のような話があるが、それが実態に最も近いようである。

「胡弓の節で、こすりあんぱい、糸のあんぱいでね、よく上手にやるんだね。「何好きだ？」なんて、「んー」なんてからに、「餅」なんてね。「餅だ」なんて。「何餅いい？」なんて、「小豆餅アいい」なんて、「南蛮餅はどうだ？」なんて、「南蛮餅は辛いからやんだアー」なんてやつたりしていたもんだ」

これら餅の問答を見ると、村上利七の伝承は胡弓の芸を三味線の芸に転用したものであることは明白である。春吉の場合と同じ「南蛮餅」が出てくるが、利七の場合、実際に南蛮を売り歩いていたわけだから、一種の物売りの口上である。しかもこの南蛮餅とは実際にありえない餅となると、滑稽さは倍加されることになろう。

岩手県遠野市辺りで採録された「座頭の夜語」と題する話の前半

は、餅を腹一杯食べた座頭ノ坊様が宿語りを望まれても語り物を語らずに、「ああ腹ちえエ　ああ腹ちえエ 小豆餅一杯一杯三杯」などと語つてしまがしてしまった話である。⁽²⁰⁾この話では別に盲僧が胡弓を使うわけではないが、この言葉はこれまで見てきた餅の問答と根本を一にする伝承であると思われる。

〔笑話との交渉〕

まだ幼かつた千田よしの媼に、佐藤春吉は胡弓の音で動物の鳴き声を出して見せた。

「ニヤンコ「猫」鳴けや」なんつうと、「ニヤオン」なんて、こういうふうにこするとね、こすりよらで、言葉出してやつた人だつけね」

これは猫だけについての問答であるが、これに鼠が加わった問答も春吉は演じている。

「お前なんだア？ 鼠か猫か？」「チユウチユウ」「あつ、鼠か」「猫コカ？」「ニヤオン」なんて、「あつ、猫か」なんてな、そんなこと言つたの」

また、盲僧と胡弓の問答ではなく、これに猫と鼠のやりとり、そして猫と鳥のやりとりが加わった話もしている。

「鼠が具合悪くていたと。「ああ、鼠が具合悪いのか」と言うとね、「具合悪いつうから、これ、猫や行つてお見舞い語れや」てこう言うとね、猫が「ニヤンとししたア？」て言うの。そうすつと、鼠がそこでね「チユウチユウ、チユウともよくな」て。そうすつと、「なんだ鳥も具合悪いのか。ほんでや、行つて見ろや」なんて。また猫が「ニヤンとししたア？」て。そう

すつと、鳥が「ガオッタア「弱った」、ガオッタア」て「語り手笑う」、そういうふうな胡弓弾くのね」これら三つの伝承は別個に存在するのではなく、話が生成していく過程を見事に示してはいまいか。その話の生成を司っているのは、佐藤春吉個人のようにも思えるが、そうではなく、おそらく盲僧たちの手垢にまみれてきた伝承であるにちがいない。

春吉は子供相手に、いや子供相手だったからこそわかりやすく順番に演じて見せたのであるうが、それはまさにこの話が鍛え上げられてきた生成の過程を復演することだったのではないか。

もう一つ、次のような話も演じている。

「カジカがね、「火事だ、火事だ」て教えたって、「火事だ、火事だ」て胡弓で出すんですか：右井質問」、「火事だ、火事だ」て胡弓で出すの。音を出すの。そんで、こんだ「なんだドジョウや、わかんねえか」と言うの。そいつとドジョウが、結構構だ、結構だ、どこだ、どこだ」と、こう胡弓で出すの。

系で。そうすつとね、こんだ「ウナギはわかんねえのか」なんていふとね。人が言うの。そのコキュウボウサマという人がね。そうすつと「ああ、嘘だ、嘘だ」と。「ああ、そうか」なんてこの場合、動物の鳴き声というよりは、動物の名前の頭韻を踏んだ言葉のおもしろさを狙った話である。この話は、岩手県には見出だすことができないが、宮城県には「言葉遊び—火事さわぎ」と題する笑話が、名取郡秋保町・多賀城市・遠田郡田尻町・桃生町・登米郡南方町から採録されている。⁽²⁾盲僧がこうした笑話を胡弓の芸に取り入れたというよりも、むしろ逆に胡弓の芸から笑話が発

生したのではないかと推測される。東北地方の盲僧は、直接に昔話や笑話を語る以外に、このような胡弓の芸や、八人芸、早物語などを通して昔話や笑話の生成に深く関わってきたのである。

注

- (1) 『狂言集』下、朝日新聞社、一九五六。
(2) 『御伽草子』、小学館、一九七四。

(3) 注1に同じ。

(4) 注2に同じ。

- (5) 岡見正雄「琵琶法師と旅」『日本の旅びと』、大阪書籍、一九八三。

- (6) 「駄賀座頭」項など『日本古典文学大辞典』四・五、岩波書店、一九八四。

- (7) 『日本歌謡辞典』、桜楓社、一九八五。

- (8) 『近代歌謡集』、有朋堂文庫、一九二七。

- (9) 田辺尚雄『日本の樂器』、柏出版、一九六四。

- (10) 『続燕石十種』三、中央公論社、一九八〇。

- (11) 中山太郎『日本盲人史』正篇、八木書店、一九七六復刻。

- (12) 注11に同じ。

- (13) 永井彰子「近世、筑前・筑後ににおける盲僧の実相」『部落解放史ふくおか』一九八七・三三。

- (14) 川島秀一「座頭の伝承」『漁村』、一九八七・四。

- (15) 丸山久子・佐藤良裕『陸奥二戸の昔話』、三弥井書店、一九七三。

(16) 注14に同じ。

(17) 鈴木省三『仙台風俗志』、雨香園、一九三七。

(18) 拙稿「早物語「餅合戦」の伝承」(『学芸国語国文学』、一九八五・三)。

(19) 注14に同じ。

(20) 佐々木喜善『聴耳草紙』、筑摩書房、一九六四。

(21) 『日本昔話通観』四、同朋舎、一九八一。

付記一 本稿の成るに当たって、胡弓を弾く盲僧の話をしてくださった話者の方々ならびに調査に同行してくださった川島秀一氏に厚く御礼申し上げる。

付記二 本稿は大会発表の草稿をもとに訂正加筆したものである。

要旨と発表で簡単に触れた日本とアジアに広がる胡弓の芸全般については、紙数の関係で一切を割愛した。なお、発表の折、鹿児島県の芸能に出る胡弓弾きのことを御教示いただいた荒木博之氏、中国四川省の胡弓を弾く盲人のことを御教示いただいた伊藤清司氏に御礼申し上げる。

付記三 発表後、宮城県本吉郡津山町、山形県米沢市、新潟県長岡市に胡弓を弾く芸人が来たことを御教示いただいた川島秀一氏、武田正氏、鈴木昭英氏に御礼申し上げる。戦前くらいまで、盲僧以外にも胡弓を弾く旅芸人は東日本の各地にいたことがわかる。

付記四 拙稿「奥淨瑠璃と琵琶覚書」(『山形の民話』、一九八七・七)で、東北地方の盲僧の琵琶について論じた。本稿と一連の論文になるので、あわせてお読みいただければ幸いである。

(いしい・まさみ／筑波大学附属駒場中高等学校)